

月刊

いじろのとも

第九卷

十月号

子どもは叱れ

子どもなら

ほめたら叱れ

躰けとは

そうしたもの

知るべしぞ

だがしかし

叱る時には

愛情を

感じる仕方で

叱るべし

仏のいのちを生きる

み仏の

はかりしいのち

われ生きる

今日は今日暮れ

明日は明日明け

人生を考え直して

みたい人は（五七）

『正法眼蔵』解説

前回の予告の通り、今回から新しいシリーズを始めます。何にしようかと、いろいろ考えましたが、結局、道元の『正法眼蔵』の解説にすることに致しました。

私と道元との関わりは古く、私が大阪経済大学で、鈴木亨先生（現理事長）から哲学を学んだときに始まりです。先生の本や話の中に道元が出てくるのですが、でも、その当時は、西田幾多郎も鈴木先生の「響存哲学」もよく理解できていませんでしたので、「道元は偉いのだなあ。もし仏教を学ぶなら道元にしよう。」と思うぐらいで、本当の偉さは分かっていませんでした。

でも、もう六〇七年前になるでしょうか、宗教に詳しい学生が私のゼミ生となり、その演習で道元の『学道用心集』を読むことになり、その当時発刊されたある人の解説書をテキストとすることにしました。それを読んでいくうち、道元の偉さが分つたのはいいのですが、その他に、道元は決してそんなことを考えているわけではない、と思える解説がかなり出てきたのです。その人は、

道元の専門家でしたので、とても驚きました。これでは道元が気の毒だと思つたのです。いつか、正しい解釈をしなければ、と思うようになったというわけです。

そんなことが下敷きにあつて、今回のシリーズの候補として、『正法眼蔵』を読んで見ることになりました。そこで、まず目がいきましたのは、道元に関する本では最初に購入しました、有名な（？）中村宗一著『全訳正法眼蔵』の巻一でした。その出だしは、第一「現成公案」です。その現代語訳は次の通りでした。

すべてのものごとを仏道の立場である「ただしくものを見る道」の上から見るとき、その一々は真にそのものごと自らのありのままを現成しているから、迷い、悟り、修行、生、死、諸仏と衆生をありのままに見、明らめるのである。総てのものごとを無我の立場、仏道で見るとき、迷いもなく悟りもなく、諸仏もなく衆生もなく、生もなく死もない。

もともと仏道は、有るといふ立場にも、無いといふ立場をも超越し捉われないものであるから、生死を解脱したところに生死があり、迷悟を解脱したところに迷悟があり、解脱のあるなしを問題としないところに解脱があるのである。しかしなお、そのことがわかっていながら、人は華の散るのは華を惜し

むから散ると見る、咲かしておきたいと思う頃に散るとなげき、草の生えるのは草を嫌うからと見る。仏道はものごとを自己の体験として把むところに現成する。

何度か読みなおしてみても頂けませんでしょうか。お分かりになれましたか。

多分、なんのこともかよくお分かりにならないのではないのでしょうか。

因みに、原文は次の通りです。

諸法の仏法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生（しよう）あり死あり、諸仏あり衆生あり。万法ともにわれにあらざる時節、まどひなくさとりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし。仏道もとより豊儉（ほうけん）より跳出（ちようしゅつ）せるゆえに、生滅あり、迷悟あり、生仏あり、しかもかくのごとくなりといへども、華は愛惜（あいじゃく）にちり、草は棄嫌（きけん）におふるのみなり。

この原文をご覧になれば、中村訳が訳者の解釈を交えた、強い意識であることがお分かりと幸いです。

そこで、もう少し、原文に忠実な現代語訳を紹介しておきます。それは、玉城康四郎という東京大学文学部のインド哲学の教授だった方で、自分でも自信をもって五年前に出された訳です。

ありとあらゆるものが仏法であるとみるときは、迷いもあれば悟りもあり、修行もあり、生もあり、死もあり、諸仏もあり、衆生もある。

しかし、ありとあらゆるものが我とともに無くなつたときには、まどいも悟りもなく、諸仏も衆生もなく、生も滅もない。いつさいは絶対無である。

仏道はもとより、このような有無の境界をとび抜けているのであるから、事實は事実のとおり、生滅もあり、迷悟もあり、衆生も仏もある。しかしそれはそうでありながら、花が散ればまことに惜しいし、草が茂れば実にはやなものである。

しつこく人の訳や原文を載せましたのは、私がした体験の追体験をして頂きたいと思つてのことです。私は、初めに、これらの現代語訳を読んだだけでは、道元が言わんとするところが、殆ど理解できませんでした。後で、自分で考えてみて、これでは不十分だと思つたのです。

皆さんも、もう一度、原文と二つの訳を読み直してみても頂けるでしょうか。

お分かり頂きましたでしょうか。

私は、原文を読んで少し考え、「これはこうだ」と直ぐ思いましたが、それは後に述べることにしまして、この二冊の本を始めとして、書庫にある、道元や仏教にとっても詳しい人たちの書いた解説書を何冊も取り出して読みました。でも、私が思うような解説には全く出会いませんでした。そして、学道用心集の解説を読んだ時と同じ思いがして、やはり、私が解説を書く意味があると確信できました。でも、ある解説書を読んで分かったのですが、この「現成公案」は、道元の神髄を述べているところで、『正法眼蔵』全体の中でも一番難しいところだそうです。不遜に思われるかもしれませんが、ある意味で道元と同じ境地に至って、はじめて分かるものだと言えると思います。

さて、前置きはこれぐらいにして、私の解釈を述べていきたいと思えます。

原文をご覧いただければお分かりのように、取り上げた部分は三つに分けられます。この三つの部分の関連が分からなければ、この文章は理解できません。

たとえば、始めと終わりの部分にはどちらにも、迷いもあれば悟りもあり、生もあれば死もあり、衆生もあれば仏もある、と書いてあります。では、どこが違うので

でしょうか。そこが分からなければ、この文章が分かったとは言えないのです。

また、第一と第二の部分の間にはどんな関係があるのでしょうか。それが理解できている解説にお目にかかることはありませんでした。また、第二と第三の部分の関係もどうなっているのが分からなければなりません。

私は、この部分全体を読んで、実は、最近読んだ、山内得立著の『ロゴスとレンマ』（岩波書店刊）を思い出しました。難しくなりますので、あまり詳しくは述べませんが（もつと知りたい方はこの本を直接読んで頂くとして）、ロゴスは、西洋の論理で、否定は否定、肯定は肯定の世界であり、レンマは東洋の論理（特に仏教）で、肯定は肯定、否定は否定の他に、肯定も否定も否定する「両否」と肯定も否定も肯定する「両肯」の二つがある、としています。

この論理は体験以外では理解できず、この本の随所でその点で山内氏には不満を感じますが、それはさておき、この「現成公案」の出だしが、まさにこの論理を形成しているのです。

まず、第一の部分は、肯定は肯定、否定は否定の世界のことを言っています。多くの解説書は、これを絶対肯定の世界だと書いていますが、そうではありません。

私たちが、現実には生きている世界が、この世界なので
す。人間の意識している世界がこの世界なのです。そこ
は相対な世界であり、あらゆる存在は、お互いに「あい
対して」存在しています。それは、互いに相互依存して
いることを意味しています。お互いが否定しあい、お互
いが相互に依存して肯定しあっている世界です。善は善、
悪は悪、真は真、偽は偽、美は美、醜は醜、の世界です。

しかし、この世界は、相対ですから相手次第で、どうに
でもそれらの判断基準は変わります。うつろう世界です。
確実なものはどこにもありません。仏教で言えば、諸行
無常の世界です。こうした世界が、出だしにありますよ
うに「諸法の仏法なる時節」なのですが、では、なぜそ
うなのでしょう。この部分が、なかなか理解できない
ようですが、これは、この世のあらゆる事象を仏の顕現
(あらわれ)と考えれば、そう言えるのです。でも、こ
れが、第三の部分の世界とどう違うのでしょうか。それ
は、次の第二の出だしにありますように、「われ」があ
るかどうかに関わっています。この第一は「われ」が関
わる世界なのです。我への執着がある世界です。第三は
その執着を超えた世界と言えます。

第三の前に、第二の世界ですが、これは、山内氏の言
葉で言いますと「両否」の世界と言えるものです。私の

モデルですと、自己(我)の意識のはからいをすべて捨
て去った、無意識の世界への沈潜と言えるものです。そ
こには如来が宿られていますので、その如来の働きと自
分が生きようとする働きとが統合されていくのです。

その統合された世界が、次の第三の世界なのです。山
内氏の言葉で言えば、「両肯」の世界で、総てを肯定す
る世界なのです。

そのことを表す言葉が「仏道は豊俵より跳出せる」な
のです。仏道は否定と肯定を超越しているのです。両方
を肯定することができるのです。「華は愛惜にちり、草
は棄嫌におふる」ことを両方とも肯定することができる
のです。華を肯定するが、草を否定するという第一の世
界とは異なるのです。

その世界は、生も肯定できれば、死も肯定できる世界
なのです。死は生の否定ですが、その否定も肯定するの
です。実際の情緒で言いますと、死を怖がらなくてもよ
い世界なのです。死後の世界が気にならなくなる世界な
のです。それは不死の境地といえます。境地ですから、
理屈ではなく、実感することと言えます。

最後に、実は最初に述べるべきことでしたが、「現成
公案」とは何なのか、少しだけ検討しておきます。

「現成」は極めて深い意味をもっていると、私は思い

ますので、後回しにしまして、まず公案についてですが、それは、秋月龍 著『道元入門』（講談社現代新書）（一八六頁）によりますと、『正法眼蔵』という公案の公は平等の義であり、案は守分の義である。この二つを合わせて、公案は、「差別即平等、平等即差別」を指す語だと述べています。

私は、これを読んで、なるほどこうした世界の実現が「現成公案」なのだ、直観しました。

これまで述べてきましたことと言いますと、肯定は肯定、否定は否定の第一の世界は、差別の世界です。そして、否定も否定し、肯定も否定する第二の世界は、無差別平等の世界です。そして、最後に肯定も肯定し、否定も肯定する第三の世界が、「差別即平等、平等即差別」の世界と言えるのです。

差別と平等という元来矛盾するものが、「即」で結ばれるためには、一旦すべてのものが無差別に平等である世界を知ること（それは、私の体験で言えば自分と仏が一体である世界）が、必要不可欠なのです。

それが、実は道元のいう「現成」ということなのです。私の「自己・他己双対理論」では、人間の精神は、自己と他己という、二つの運動する、あい矛盾する働きからなっているとします。その運動が、ヘーゲル（ドイツ

の哲学者）流に言いますと、自己（有）と他己（無）の弁証法的運動なのですが、それは「成」だと言えるのです。私たちが生きていくということは、日々刻々と私たちは成っているということなのです。どこまでも成りつづけ、遂には「成仏」というわけです。

この成仏を修行によって実現するのが、道元では「現成公案」であり、弘法大師では「即身成仏」ということになるのです。

私の理論では、意識水準のロゴスの世界では、日々刻々と相対・有限・時間的な世界を弁証法的に運動して成っていくのですが、しかし、道元や空海のように、修行によって真の人に「成」れば、もうそこでは、成ることは無くなると言えます。そこには、絶対・無限・永遠が待ち受けており、時間を超越して不死の境地に至るからです。でも、そのためには、修行がいりませんが。

来月から取り上げていきますようにこの「現成公案」の巻には、こうした境地に達するとは、どういうことなのか、続いて述べられています。

なお、現成の「現」とはどういう意味なのか、疑問が残っていますが、道元の時間論を論じる時が来るまで、残しておきたいと思えます。なにしろ、この時間論がまた、難しく、誤解されているようですので。

自作詩短歌等選

生き甲斐ある余生は

老人を
ほめよ・叱るな
生き甲斐が
溢れる余生
送らすために
老人を
尊敬すれば
自ずから
そうなるものと
知るべしぞ

恩とお陰は死語

他己がやせ
自己が肥りし
今の世で
恩とお陰は
死語となりけり

金の切れ目

親子でも
金の切れ目は
縁の切れ目
まして親戚
言うに及ばず

仁・義・礼

思いやりが
失われたから
人の温かさを
教える

規範性が
失われたから
悪いことは悪い
善いことは善いと
教える

これではだめだ

思いやりが
失われたら

大慈大悲を教えよ

規範性が

失われたら

仁を教えよ

乱れたら

乱れた徳を

言わないで

乱れる前の

徳を言うべし

人生の意味

辛くとも

死の縁あゆむ

人のみが

知ることのできる

人生の意味

子どもたちの願い

子どもたちに
未来の願い事を
書かせたら
みんな自分の
ことばかり
社会への思いは
何もない

してもらったこと

自己に閉じれば
してもらったことは
直ぐに忘れるが
してやったことは
いつまでも
覚えている

忘れられた言葉

おかげさま
報恩
忘れられた言葉

いま多くの人は
人の心を感じることもな
く
自分を犠牲にしても
人を助けようとするこ
もなく
人に感謝することもなく
人に恩返しすることもな
い

恩と報恩

今の世は
恩という字が
死語となり
世話になっても
そしらぬ顔す

人間の
人間らしさは
人さまを
世話することに
あるけれど
逆から見れば
人さまに
助けられたら
その恩を
感じて報恩
することが
人間らしさの
あかしでもある

失われる人情

人の世で
人が失う
人の情
人の心を
人が感じず
人情は
人の心を
感じるこころ

釈尊のつとば(七三)

法句経解説

(二五三) 他人の過失を探し求め、つねに怒りにたける人は、煩惱の汚れが増大する。かれは煩惱の汚れの消滅から遠く隔っている。

いまの大学の現状をみていますと、この偈がぴつたり当てはまるように思えます。お互いに「他人の過失を探し求め」、足を引つ張り合っています。どんな小さなことでもよい、過失が見つかりますと、上役(管理者)にすぐ告げ口をして自分の点数をかせぎ、立場をよくしようともがきます。また、少しでも自分よりすぐれた研究をする人は妬ましくてたまらず、もぐら叩きのように、よつてたかつて出る杭を打ちます。また、それをやられた人はやられた人で、怒りに狂つて、仕返しをたくらむことになつて行きます。こうして、お互いに恨みの晴らしあいに奔走しているのです。勿論、それは直接的に出世競争・所得増大競争につながっています。

この大学の現状ほどに、この偈の「煩惱の汚れが増大」し、「煩惱の汚れの消滅から遠く隔つていく例として適切な例はないように思えるほどです。嘆かわしい

限りです。これでは何時までたつても、自分が幸せになることはありません。

相対な存在者は、必ず間違いを犯します。私の体験ですと、毎日することが、すべて間違いだと思える大学の同僚すらいます。でも、大切なことは、他者の間違いや過ちを指摘するのではなく、自分も同じように間違いや過ちを犯していることに気づくことです。

なのに、悲しいかな、他者の間違いや過失を指摘する人は、自分の間違いや過失を棚上げしています。自分が間違いや過失を犯していることに、実は、気づいていないのです。

いま、日本人は経済的に豊かになって、逆に、こころが貧しくなっています。私の言葉で言いますと、自己を肥大させて、その分、他己を萎縮させているのです。

実は、自己を肥大させるほど、自分の思いどおりにならないとき、自分が悪いのではなく、他者が悪いと思つてしまうものなのです。そして、自分の悪に気づかないで、相手に対して怒りを感じ、相手の過失をあげつらうことになつて行くのです。

相対なものは、自分だけが絶対によいということはありません。互いに相互限定しあっています。相手が悪いのも、結局、自分が悪いのです。責任は自分にもあるの

です。そのことを謙虚に反省しなければなりません。

(二五三) 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、(道の人)ではない。ひとびとは汚れのあらわれをたのしむが、修行完成者は汚れのあらわれをたのしまない。

この偈は、結構、難しいように思えます。中村元先生の訳注によりますと、過去になされたこの偈の注釈も、いろいろと議論があるようです。

私には、次のように読めます。

外面的なことを気にかけることは、虚空に足跡が無いように、きわめて虚しいことである。だから、道の人は、それを気にはかけない。しかし、外面的なことを気につけないからといって、多くの人のように、外面に見られる汚れのあらわれをたのしむわけではない。

内容ですが、では「外面的なことを気にかけること」とは、どんなことなのでしょう。私は、それは、例えば着る服であるとか、食べる物であるとか、住む家であるとか、といったことだと思うのです。

しかし、こうしたことを気にかけることは、実に虚し

いことなのです。

なのに、第二次世界大戦後、よいことのように、日本人はこんなことばかりを気にかけてやってきました。そして、いまや世界に誇る経済大国になりました。

でも、それは、この偈にありますように、こころの汚れ、つまり内面の汚れのあらわれなのです。では、その汚れとは何のことでしょうか。

私のモデルで言いますと、それは、自己の情動への執着だと言えます。自己の情動とは、自分の欲望、情緒、気分などです。欲望は、大きくは三つあります。性欲

(子孫繁栄欲を含む) 食欲(物欲・金銭欲を含む)、優越欲(勝利欲・権力欲を含む)です。

仏教では、こうした欲望のあらわれを煩惱と呼びます。煩惱は、私のモデルでは、無意識に宿る「生命蔵識」から発する生きんとする精神の働きです。

ですから、この煩惱を否定することは、人間の死を意味します。煩惱は否定しても否定しきれるものではありません。それは私たちが生きんとする生命力の根源ですから、実は、大切なことなのです。

でも、間違つてはならないのは、自らの生きんとする力を欲望や情緒の満足にだけ費やしてはならないということです。自己の生の意味を追求することは、宗教の大

切な要素になっていきますが、それに振り向けるべきなのです。そして、それを追求するとき、「天上天下 唯我独尊」という境地に至れるのです。そして、そこに至ったとき、外面的なことに、執着する必要がまったく無くなってくるのです。外面的なことを楽しまなくてもよくなってくるのです。そのためには、自らのこころを磨く修行がいるのですが。

(二五五) 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、(道の人)ではない。造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとした人々(ブツダ)は、動揺することがない。

出だしの文章は前の偈と同じです。つまり「外面的なことを気にかけることは、虚空に足跡が無いように、きわめて虚しいことである。だから、道の人は、それを気にはかけない」ということです。

続けて、外面的なものは、造り出された現象であり、それは常住ではありえない。常に虚ろい行く世界である。そうしたものに依存していれば、人間は動揺を免れない。それは、自分のよって立つ地盤が揺らぐことを意味する。人間は何かに依存しなければ、生きていけません。何に

依存すべきなのでしょうか。

例えば、世間の評価に依存していると、その評価が変われば、動揺して、幸せではなくなって行きます。それが、権力であつても、財産であつても、健康であつても、他のどんな欲望であつても同様です。

そうした外面的なものは全てうつろっていくものなのです。ですから、それに依存すれば、動揺を免れないのです。

真理をさとした人々(ブツダ)は、外面的なものには、依存しません。内面の仏性に依存しています。ですから、外面のどんな変化にも動揺することがないのです。その外面的なものには、自分のいのちも含まれます。ですから、いのちへも依存していません。いのちに依存していませんと、死が訪れますと、不幸をかちます。あるいは死ぬのではないかと恐怖を感じながら生きていなければなりません。

外面的なものは裏切りますが、内面的なものは裏切ることはないのです。しかし、それに依存するためには、意識してできませんので、からだやこころを使った、修行がいります。現代人は、安直に何でも、あたまで理解して、利用しようとしませんが、そうは行かないところが、人間のもつ一つの悲しさといえます。

後記

一、道元の『正法眼蔵』は、論理が少々ごちゃごちゃしていましたし、少し難しかったでしょう。私としましては、精一杯やさしく解説したつもりなのですが。これ以上は体験して頂く以外に方法はないように思えます。

二、今回もそうですが、これから他人の説や考え方を取り上げて批判することがあるかもしれませんが、そこには、その人をおとしめようという意図は全くありません。ただ、従来の解釈の水準を示すための代表になつて頂いているだけです。それも、できるだけ避けたいとは思っています。

三、道元が望むように、「平等即差別、差別即平等」という公案の現成を体験する人が、少しずつでも増えてこない限り、世界平和の実現や、さまざまな差別の解消、紛争の解決は、困難のように思えます。

四、先月号で紹介しました、論文「人権問題に関する基礎的研究」を読んでコメントして下さった方が何人かありました。ありがとうございます。結構難しかったです。

五、この論文の送付を申し込まれて来たお手紙の中に、中学校の教員をしておられながら、もう二十五年も人工透析を続けておられる方がありました。創刊以来、ずつ

と『こころのとも』の読者でもあるのですが、その方の手紙に、月・水・金と週三日、五時間にわたる透析をうけながらも、現職教員で務められるのは、『こころのとも』の教えを守り、実践しようとしていることと、障害児と共に歩んできたお陰（この方はずっと続けて障害児教育に取り組まれています）だと思ふ、と書いてありました。

六、この『こころのとも』も、もう来年で一〇年になりますし、一区切りですので、来年ぐらいでぼちぼち休刊か廃刊にしようかと、思っていたのですが、こんな方がおいでなので続けようかと思ひ直しています。

月刊 こころのとも 第九卷 十月号 (通巻 一六号)	平成十年十月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

